学苑・初等教育学科紀要　No.765　14～26　(2004・6)

日本の教育再生への比較教育的アプローチ

――タイの教育との比較を中心に――

松　本　　淳

Comparative Educational Approaches to Japanese Educational Renaissance

――Focusing on Education of Youngsters in Japan and Thailand――

Jun Matsumoto

Abstract

Unlike Japanese youngsters, children in Thailand, especially children of mountain peoples have an unbridled zest for living, share deep interpersonal bonds, and are strongly independent even though most of them are considered to be underprivileged. With the valuable experience gained through visiting educational organizations in Thailand more than 10 times, I have sought to find ways to help solve a number of continuing problems burdening Japanese education and youngsters.

The purpose of this study is thus to address the following questions:

1) What problems in Japanese education today are made apparent through interviews with students from foreign countries and experiences in my daily life as an educator?
2) What can we learn from Thai education and youngsters through field studies and interviews conducted with Thai educators and Japanese living in Thailand and working closely with Thai education?
3) What recommendations for Japanese youngsters might I present?

はじめに――問題の所在――

1987年，学校に行く機会に恵まれない子どもたちに教育の機会を提供するプロジェクト（ダルニー奨学金）を始めた日本民際交流センター[1]の調査旅行で，タイ王国（以下タイと略す）の中でも最も貧しいといわれたイサーン（東北部）を訪れた時，タイの子どもたちの明るさ，素朴さ，礼儀正しさに驚嘆させられた。以後，すっかりタイに魅せられ，ほぼ毎年，タイの学校訪問を繰り返してきた[2]。

タイの子どもたちは日本の子どもたちが忘れてしまったような生きるたくましさや情緒の豊かさを持っている。一方，日本の子どもたちはそれらを年々低下させているように思える。我が国では現在，「生きる力」の育成と「豊かさ」の育成が大きな課題としてあげられている。タイの子どもたちの現状を見るにつれ，日本の教育の根本的な改善を図るためには，タイの教育との比較を基に考察していくことが極めて有効であるように思えてきた。

そこで本稿では，タイと日本の教育比較及び，子どもや若者の現状や意識の比較を通して，日本の教育再生への突破口について考察したいと思った次第である。

1．研究の目的と方法

本研究は，以上の課題意識を基に，特に次のような点を明らかにすることを目的とする。

第1は，日本の教育再生を図る上において，特に課題となる日本の教育の問題群について，日常的な体験や外国での調査や留学生との面接調査等を踏まえて明らかにする。

第2は，それらに対して，タイの教育からどのようなことが学べるかを探ってみたい。タイでの現地調査やインタビュー調査等を基に分析する。

そして最後に，上記の事柄を基に教育再生に向けての若干の提言を行う。

なお，私は教育の問題を解決するために学校教育の徹底した構造改革が必要であると考えてきたが，海外の教育を調査する過程で，教育はその土地の人々や民族の精神文化の上に成り立っているものであり，学校がそのような文化を無視して単体で成り立っているわけではないことに気がついた。

それゆえ，たとえどのようにすばらしい教育方法が海外にあったとしても，それを日本の精神文化を無視して導入することは無理があるのである。例えば，元お茶の水女子大学附属小学校教頭の星野征男先生は，ドイツの小学校を訪問した時にクラスの子ども一人ひとりに全く違った課題を宿題として出している場面を見て驚いたと話してくれたことがある。日本でも教育の世界において「個性重視」がいわれる。しかし，もし日本でクラスの一人ひとり全員に全く違った宿題を毎日出せば，「差別されている」とか「ひいきされている」ととられ混乱する可能性も高い。それは，日本人の精神構造に「みんなと同じがいい」という意識が強いからである。

たとえタイなど外国にすばらしい教育の現状があったとしても，それを日本の教育改革のヒントとすることはできても，コピーして持ってきて，挿げ替えることは無理なのである。そのことを踏まえて分析と提言を行いたい。

2．日本の教育の問題群

我が国の学校教育は様々な問題を抱えているが，外国の教育や子どもたちや若者たちと比較して，特に次のような点を問題群としてあげることができる。

（1）形を重視し，心を軽視する教育現場

日本の学校教育においては，「成績がよい」ことや「規則が守られている」など目に見え，形に表れるものが重視される一方，「志を持っている」や「夢や自分の想いを熱く語れる」といった目にも見えなく形にも表れないものは軽視される傾向がある。しかし，社会に出てからは，「夢」や「志」を熱く語れなければ相手にされないことが多い。そこには大きなギャップがある。

先日，次のようなことがあった。インターンシップをやりたいという学生がいて，知り合いの社長に二人の学生を紹介した。二人ともインターンシップに対する意欲はあったものの，「ここで何がやりたいのか」「どうしてやりたいのか」など聞かれても自分の志や将来に対するビジョンを全く語れず，社長から「今日は何をしに来たの？」とあきれられてしまった。

学生たちは，自分の志や将来に対するビジョンが熱く語れないと社会では相手にされないことを痛

感した。しかし，学校教育において自分の志を熱く語るなどは求められてこなかった。逆に「そんなことをいっていないで勉強しろ」といわれることさえある。これは，日本の学校教育が落としてしまっている重大な部分であると思う。このような現象は，広い意味での道徳教育が軽視されてきたことの結果であるといえるかもしれない。

（2）絆の切れた教育環境

学校教育現場ばかりでなく日本社会全体において，人と人との絆，人と社会の絆，人と自然の絆，人と神との絆など，すべてにおいて絆が希薄になってきているように思う。

大学時代に私が教育の道に誘われるきっかけとなったのも教育現場における絆の問題だった。大学2年生になる春休みに，小学校の時から仲のよかった友人が相談にきた。対人恐怖症で大学に行けない，バスに乗れない，道が歩けないと打ち明けられた。1週間に30時間くらい彼と話をして思ったことは「教育とは何だろう」ということだった。親も先生も彼に一生懸命勉強することを期待し，彼は素直にその期待に応えた。その結果，彼が得たものは，「一流大学現役合格」と「精神病院に行く」という2枚の切符だった[3]。目標達成と共に彼が喪失したものは大きかった。このような現象は今日ますます多くなっている。

不登校・いじめは，その背景や原因に絆の喪失の問題があることが多いように思える。学校教育現場における「生徒同士」「生徒と先生」「先生同士」の絆を恢復することは教育界の大きなテーマの一つであるといってよいだろう。

（3）世の中の動きや押し寄せる時代の問題群に対して無関心な教育現場

我が国の学校では，テロの問題，イラクへの自衛隊派遣の問題など現在起こっている社会の動きについて，授業の中で話し合われることはほとんどない。まるで学校現場は世の中とは無関係であるかのようである。また，これらの世の中の動きに対して，生徒の意見が問われることもほとんどない。このような学校現場における社会の動きに対する無関心さが若者の無関心さに拍車をかけているようにも思える。

アメリカの高校に3年間学んだ江崎由佳さんは，日本にはない授業として，エイズ，差別，湾岸戦争，セクハラ，同性愛などの社会問題について理解を深めたり，話し合ったりする授業をあげている。そしてこれらの社会問題に対して「あなたはどう考えるか」と自分の意見が常に問われるのである。この時に自分の意見がいえないと，とても恥ずかしい思いをする[4]。

岡崎玲子さんは1992年のアメリカ大統領選の時に7歳だったが，当時通っていたカリフォルニアの小学校の授業では，新聞を使って両候補のことを詳細に調べ「自分だったらどちらに投票するか」を真剣に考えたという[5]。さらに2000年の大統領選の時は，アメリカのチョート・ローズマリー・ホールの生徒だったが，ケネディ大統領の母校であるチョート校は政治に関心が高く，大統領候補の側近を高校に招きテレビ討論さながらのディベートが行われた。生徒たちは聞き入り，選挙権のある生徒や職員たちは真剣にどちらに投票するかを考えたという[6]。

このように時代の動き，社会の動きに対する関心を持つことは国際化時代を生きていく基本であると思うが，日本の学校教育現場ではほとんど何の取り組みもされていないのが現状である。

（4）学ぶことが現実を生きる力の源になっていない

勉強の目的が目先の試験や受験をクリアすることになってしまっていて，将来自分がどのような世界を創造していきたいのか，そのために今，何を勉強したらいいのかといった視点が若者の中にも学校教育の場にもあまり重要視されていない。学ぶことと現実を生きることの間に乖離が生じているので意欲が出てこないのだと思う。

カンボジアからの留学生，レスミーさんに「カンボジアの教育」についてお話を伺った際に，「カンボジアでは，大学で勉強することはその分野のプロフェッショナルになることを意味している」のだと話してくれた[7]。

つまり，大学で英語を専攻すれば，将来英語のプロフェッショナルとして通訳や翻訳を仕事とするということを意味しているのである。日本では大学で勉強したことは「将来の教養のため」といったあいまいな目的でも通ってしまうことがある。しかしこれは，国の復興をかけて大きな責任を背負って大学にきているカンボジアの学生たちからすると考えられないことであるかもしれない。

タイのバンコクにある国立タマサート大学の日本語学科を何度も訪問したことがあるが，大学にきて初めて日本語を学ぶ学生も多いにもかかわらず，3年生ともなると日本語の弁論大会に出る学生も多くいる。学生たちと日本語で話していても普通に会話ができるのに驚かされる。日本語学科を卒業したということは，〈日本語でメシが食っていけること〉を意味しているのだ。学ぶことと将来自分たちが生きていくこととは，彼らの中でつながっていると思った。

（5）元気のない若者

表1と表2をご覧いただきたい。表1は「日本の若者の現状」について聞いた結果である（調査は1996年から1998年）[8]。若者と近い関係にある306人（主に大学生）が日本の若者をどのように見ているかを調査した結果から多いもの順に20位までを示している。

表1　日本の若者の現状

（1）人の目に左右される
（2）自己中心
（3）目先のことばかり考える
（4）群れたがる
（5）ひ弱
（6）個性がない
（7）少年犯罪の多発
（8）非常識
（9）弁別力がない
（10）偏差値・受験・学歴のために勉強する
（11）お金の価値がわからない
（12）社会との繋がりを感じていない
（13）ボンヤリと生きている
（14）言葉の乱れ
（15）人とうまく関われない
（16）勉強しない大学生
（17）ゆとりがない
（18）物質的に恵まれている
（19）いじめによる不登校多発
（20）海外が身近

表2　ベトナムの若者の現状

（1）頭が良い
（2）活発
（3）創造性
（4）スポーツ好き
（4）きれい・かわいい
（6）追求心がある
（7）国のために働く
（8）国際交流に関心がある
（8）将来のことを考えている
（10）勤勉・おしゃれ
（11）知識を持っている
（12）向上心がある
（12）音楽好き
（12）自立
（15）熱心
（15）若い
（17）恋愛
（18）ユーモア
（19）愛国心
（20）社会の弊害に陥る
（20）社交的
（20）明るい

※同人数のものは同じ順位で整理した

表２は，「ベトナムの若者の現状」についてアンケート調査をした結果である（1998年）。

ハノイの国立保育者養成大学１番[9]の学生103人にベトナムの若者をどのように見ているかを調査した結果から，同様に多いもの順に20位までを示している。

授業などで学生たちに「日本の若者の現状」を列挙させると「よいことが浮かばない」と，悩んでしまう学生も多い。表１から日本の若者は，全体的に元気がなく，自分だけの小さな幸せだけの中に生きていて，頼りなげに感じられる。教育の場において「生きる力」の育成が重視されるようになった[10]が，学校教育の場だけにその任を負わせるのは無理があるだろう。

戦後，日本は経済的に豊かになることが「幸せ」だと思い，ひたすら勤勉に働き，経済大国といわれるまでになった。しかし，一方で我々日本人は昔から持っていた精神文化を横に置き，拝金主義に走り，若者は生気を失ってしまっている。私たち日本人は今，こうした状況からの「方向転換をせよ」「意識改革をせよ」と呼びかけられているのではないだろうか。

一方，表２のベトナムの若者は日本の若者とは対照的である。1975年に戦争が終了し，1986年にドイ・モイ（Doi Moi）[11]により経済活動が活発になってきたベトナムの若者からは「自分たちがこれからの国を作っていくのだ」という活気が感じられる。

日本の若者の現状の（16）位に「勉強しない大学生」とあるが，日本人学生の勉学に対する意欲の衰退を留学生から指摘されることは多い。オーストラリア国立大学からの留学生，チ・チューさん[12]は「日本の大学にきて何かビックリしたことがありましたか」との質問に「学生があまりに勉強しないのでビックリした」と答えた。また，ソウル女子大学からの留学生，イ・ハミさん[13]は「もっと周りが勉強意欲に燃えている環境の中で勉強したい。早く，自分の大学に戻って勉強したい」と日本の学生を前に語った。

柏倉眞紀子さんは，日本の大学を卒業後，商社に数年勤めた後，アメリカのカリフォルニア州にある女子大，ミルズカレッジ[14]の大学院に留学した。そこで彼女が体験した大学生活は，日本のものとは全く違っていた。ディスカッション形式の授業では教室中が熱気でムンムンしてくる。女学生たちの発言が教室を縦に横に弾丸のように飛び交う。これほど熱気を帯びた授業に出会ったのは初めてだったという。学生たちの勉強に対する真剣味は教室の中だけではない。夕食後，図書館は夜中まで席がびっしり埋まっている。休み時間や放課後になると教員のオフィスの前には質問や相談をする学生の長い列が絶えない。毎日が自分自身との戦いなのだ。地道に勉強を続けない者は脱落してゆく。うっ積するストレスをうまく処理できない者はノイローゼに陥ってしまう。山のように積まれた本を読むのに徹夜が続き，座りっぱなしのため体中の骨が突き刺さるように痛んだ。こんなに真剣に勉強したのは生まれて初めてだったという。極度の緊張と疲労で何度も崩れそうになったが，達成した時の喜びは格別であった。しかし日本の大学時代，そしてOL時代にこの種の喜びを感じ得なかったという[15]。

（６）自分だけの小さな世界で生きようとする若者

私が担当する授業[16]において，昭和女子大学短期大学部初等教育学科の１年生に「もし，子どもから何のために勉強するのかわからないので勉強する意欲がわかない」と相談を受けたらどう答えるかと問いかけたことが何度かある（学生数は毎年約120名）。

1997年度の1年生の回答は，「自分のため」という意味の回答群と，「他の人や世界とよい関係を作っていくため」など他とのつながりの充実を意味する回答群の2つのグループに分けることができた。ところが，1998年度の学生は3，4人以外はすべてが「自分のため」となり，次の年度からは「人や社会とのかかわり」の向上や他への貢献を意味する内容を書く学生はいなくなり，すべてが「自分のため」を意味する回答群になった。

日本の若者が自分の小さな世界に閉じこもってしまい，小さな自分だけの幸せを追求する傾向は加速度的に強くなっているように思える。電車に乗れば，若い女性が熱心に化粧をしている光景をよく見かける。このような光景は20年前には見ることはなかった。「化粧室」などという言葉は死語になってしまったかのようだ。また，バスや電車の中で周囲を気にせず，携帯電話で大声で話をしている若者の姿も頻繁に見かけられる。それを注意すれば，怪我をさせられたりする事件まで起きている。

2004年3月，タイで山岳民族の子どもたちの寮「暁の家」を運営する中野穂積さん[17]に取材をした時に，現代の日本の若者の特徴を「人とかかわろうとしていない」「人がここにいるんだと思っていない」「人が何かをいっても注意を払わない」「自分の仲間とだけ分かち合っている」「無表情」と表現していた。

生活が便利になり物が豊かになると，その生活に安住し，自分だけの小さな世界の幸せを追い求める若者が増えてくる。そこに，日本の未来の不安を感じずにいられない。日本の社会全体が持っている教育力が落ちてきているのではないかと思う。

3．タイの教育から学ぶこと

以上のような今日の我が国の学校及び若者の現状に対して，どのように対応していけばいいのだろうか。教育は若者を活性化することができるのだろうか。

私がタイの教育機関を何度となく訪問する中で感じた「日本の教育の課題」の解決のヒントとなると思われる事柄をいくつか記してみたい。

（1）絆のある世界

1996年8月に「第2回タイ教育研修旅行」[18]において，学生と社会人と一緒にタイのチェンライ県の「さくらプロジェクト」を訪問した。同プロジェクトは日本の里親などの支援を受け，家が学校から遠い，貧しくて学校に行けないなどの理由で，教育を受ける機会のない山岳民族の子どもたちのための寮を運営している[19]。

夕食時に寮の広間に座って子どもたちの間に入れてもらって食事をしていると，参加者の一人会社役員の諏訪兼久さんは「人恋しさ」を感じたという[20]。それは「寂しい」という感覚ではなく，「楽しい」という感覚なのだという。日本でサラリーマン生活をしていると，常に立場がついてまわる。人と出会っていても「相手になめられたらいかん」とか，「こっちが優位に立っていなくては」という思いが出てきて，結果として自分の周りに石垣を積んでしまう。それが，さくらプロジェクトでは違うのだ。出会うことがうれしい。そんな「人恋しさ」を感じたと諏訪さんはいうのである。だから食事の時に「あなたの名前はなんていうの」というタイ語を知りたくてモジモジしていた。日本では，小学生や中学生をつかまえて，喜びに顔をほころばせて「あなたの名前は？」と聞く出会いはなかなか生まれない。

その後，諏訪さんは5年連続して「タイ教育研修旅行」に参加するのであるが，1998年には日本での会議出席のために旅行の途中で帰国することになり，さくらプロジェクトに着き，夕食をとるとすぐに飛行場に向かった。帰国後，話を聞くと，さくらプロジェクトを後にして飛行場まで泣きっぱなしだったという。なぜかというと，さくらプロジェクトの子どもたちが手がちぎれるのではないかと思うほど手を振って別れを惜しんでくれたことに感動し，涙が止まらなかったのだと話してくれた。

私たちが日本にいる時は，人と人との出会いにこれほどの感動をすることはまずない。なぜだろうか。その理由や背景が理解できるものとして，1996年に「タイ教育研修旅行」に参加をした人々の記録から二人の研修記録を紹介したい[21]。

「タイの子どもたちとの出会いは，私の心を開放してくれた。出会いとは，本当は楽しいものなんだ。ドキドキするものなんだ，ということを思い出させてくれた。人は本当は，人に興味があるのだと思った。しかし，（日本では）プライドなどが邪魔して本来の姿を消し去っているように思えた」（諏訪さん）

「タイ人は皆楽しい時は楽しい，悲しい時は悲しい，そういう表情を出して生きている。自分に素直な裏表のない人間がそこにいるのです。日本は，物質的にはどんな国よりも豊かであっても，人間的にはどんな国よりも貧しいのかも知れないと思った」（村瀬さん）

私自身もさくらプロジェクトの子どもたちとの出会いから絆を感じる体験をしたことがある。さくらプロジェクトで食事を終えたあと，庭にいるとオロタイ・レトという女の子が「ウオーク？」というので，一緒に散歩に行くことになった。その後を3人の女の子が追いかけてきて，一緒にたわいない話をしながら5人で田舎道を歩いていた。見渡すと360度深い緑の中だった。その時，不思議な感覚が私に訪れた。自分の心が波打ってどこまでも広がって行くような感覚だった。日本にいた時に，こだわったり，とらわれたり，怒ったりしていたことが，とても小さなことに思えた。子どもたちとつながり，自然とつながり，心が世界に対して開かれた感覚だった。

（2）人や社会に貢献する志を持つ若者

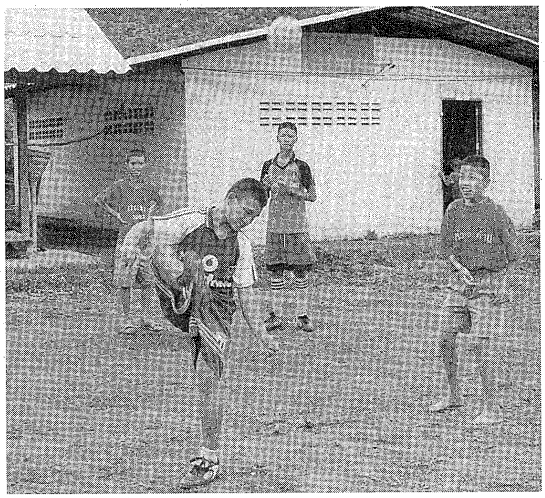
さくらプロジェクトで子どもたちと食事をしていると，卒業生のカンポン君とマリサさんがやってきた。

バンコクの大学の政治経済学部を飛び級して3年半で卒業する予定のカンポン君に「卒業したら，何をやりたいのか」と聞くと，「タカシの手伝い」をしたいという。タカシというのは，さくらプロジェクトの代表の三輪隆氏のことであり，このようにして志が伝承されていくのかと思った[22]。

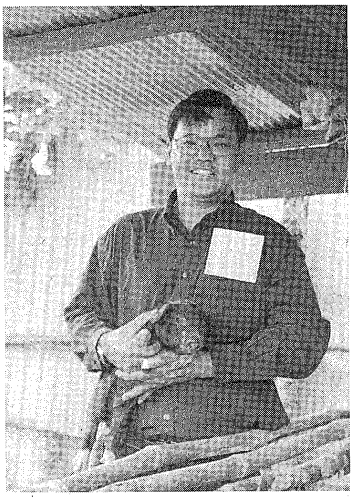
また，マリサさんは，タイ東北部で最難関といわれるチェンマイ大学の1年生になって，意気揚々としていた。山岳民族の中に生まれ育ち，そのままであれば，小学校教育程度で終わっていたであろう少女が，縁あって「さくらプロジェクト」の支援でチェンマイ大学まで行くことができた。その彼女に卒業したら何をやりたいのかと聞いてみた。すると，何のためらいもなく「タイの人々のために働きたい！」ときっぱりと答えた。

（3）生きることと学ぶことがより近い：ファイチャカーン小学校の「子どもの村」

ファイチャカーン小学校はチェンマイ県のチェンダオから車で50分ほど行ったところにある。リス族，ラフ族など山岳民族の子どもたち377人[23]が勉強している。



ファイチャカーン小学校の子どもたち



子豚を抱くサニット校長

魚にエサをやる先生

2000年にファイチャカーン小学校を最初に訪問した時に，校長のサニット先生より「家が遠くて学校にこられない子どもたちが山の上の方にまだ数百名いる」という話を聞いた。二人の友人と相談し，寮建設のための材料費を提供することになった。そして，村人たちと先生方の手作りによる三つの寮ができ，約60人の子どもたちが新たに学校で学べるようになった。

しかし，寮ができればそれに伴って新しい問題も発生してくる。子どもたちの食糧の確保，トイレや水浴び場も必要になってくる。そこでサニット先生が考えたのは，学校の敷地内に水田を作り，水田には鯰（なまず）も２千匹くらい飼い，子どもたちの食糧源を確保するというものだった。アヒル[24]，鶏を飼うほか，養豚もはじめ，それらを売って子どもたちの食糧を買う資金にしている。これが「子どもの村」である。

日本では最近，小学校の「総合的な学習の時間」などで水田を農家から借りて農作業をする体験学習をしているところもあるが，ファイチャカーン小学校では水田作りは，勉強以上のものがあり，失敗したら食べるものがなくなってしまうという切実さがある。ここの子どもたちにとって「学ぶこと」は「生きること」と背中合わせなのである。

独身の先生たちは，男の先生も女の先生も寮に泊まって24時間子どもの面倒を見ている。しかし，まだ100人くらいの寮生を受け入れたいので，教室に寝具を入れて寝泊りできるようにすることも考えているとの話であった。

このファイチャカーン小学校に，2004年２月１日から１週間，岩田百代さん[25]とその友人の古谷有美さんがボランティア研修に行った。そこで岩田さんが見た子どもたちの姿は日本の子どもたちとはまるで違っていた。以下は岩田さんの訪問記録である[26]。

「朝５時起床，６時から体操，体操後，部屋の掃除，朝ご飯の準備，洗濯，登校…。朝早くから子どもたちは，自分のことを自分でやっていた。日本では考えられない生活だ。掃除も洗濯も，先生などにいわれてではなく，自分たちから動き出す姿に初めは驚いた。お湯など出ないので，大きな水がためてあるところで，まだ朝早く薄暗いときから一生懸命子どもたちが洗濯をしている。大きな包丁を持ってきれいに野菜を切ったり調理をしている。小さい子どもの面倒は年上の子どもたちが見る。

大人から指示されることなどなくても，自分のことを自分たちでやっている姿を見て日本の子どもは同じことをどれだけできるだろうかと思った。自分で洗濯をしたことのある子どもはどのくらいだ

ろう。大人にいわれる前に，自ら掃除を始める子どもなんてどれだけいるだろうか。環境が異なると，こんなにも違うものなのだろうか。」

岩田さんにとって「子どもの村」での子どもたちの生活ぶりはとても新鮮だったに違いない。学校においても，子どもたちは違っていた。先生が教室にいなくても子どもは，一生懸命課題に取り組んでいる。学習意欲が全く違うと岩田さんは感じた。

ある日，岩田さんは子どもたちが鶏の首を絞めているところを見た。

「その子どもたちはその後，ちゃんと調理できるように，きれいに毛を剝いでいた。誰にいわれるということもなく，毎日子どもたちが畑の手入れをしたり，水をやっていた。掃除，洗濯，料理以外にも，生活していくために子どもたちは自ら動いていた。」

岩田さんは日本が学校教育において目標にしている「生きる力」を，タイの（山岳民族の）子どもたちは，もう既に今まで生きてきた中で身につけていると感じた。

ファイチャカーン小学校の子どもたちにとって，「学ぶこと」と「生きること」は，離れたものではなかった。「学ぶこと」が，しっかりと「生きること」と結びついて人生を支えていくのである。

4．提言と展望

以上の考察を基に，これからの日本の教育再生に向けていくつかの提言をしてみたい。どのような社会も闇の部分と光の部分を持っている。タイの教育も理想であるというわけではなく，日本とは違った様々な問題を抱えている。例えば，「都市部と田舎の教育の格差の問題」「教育を受ける機会のない子どもたちの問題」「暗記型の教育」「若者の間に蔓延する麻薬の問題」などがあげられるが，これらについての検討は別の機会にゆずることにしたい。

提言（1）若者はもっと世界と出会おう

視野を広げるということは，必ずしも楽しいことばかりではない。世界の苦しみ悲しみの現実に出遭うこともある。しかし，世界の片隅に切実に生きている人がいることを知ること，温かい人間関係を体験すること，悲しみの現実に直面することなどを通して，自分の心の中に眠っていた「願い」が引き出されてくることがある。「世界に尽くしたい，世界に応えたい」という想いが湧き出てくるのである。

小学校５年生[27]の時から地雷について調べている柴田知佐さん[28]は，その現実に強い衝撃を受け，「何か自分にできることはないか」と考え，小学校６年生になる春休みに「ノーモア地雷」と題する漫画に描いた。さらに，中学１年生の夏休みにはカンボジアに行き，子どもたちが地雷を踏んで足をなくしたり，死んでしまったりしている現状を見た。地雷によって作り出された現実を見た驚きと，深い悲しみと地雷撲滅への願いを持って書かれた「カンボジア旅日記」や「カンボジア旅日記（漫画編）」は，「ノーモア地雷」と共にインターネット上で公開され，「総合学習」の教材などにも使われている[29]。

また，対人地雷全面禁止条約が発効した1999年３月には，国会に小渕恵三首相を訪ね「ノーモア地雷」を訴えた[30]。

提言（2）脱文明社会を経験しよう

経済的に豊かになり，楽な生き方を求めてしまうと人間は自己中心的でひ弱になりやすい。そこで私は若者に，あえて多少不便な生活や苦労する経験もしてもらいたいと思う。

前出のファイチャカーン小学校でボランティア体験をした二人の若者にとって，初めての体験が多かった。ためてある水をかぶって身体を洗うこと，一度停電したらいつ復旧するか見通しがつかないこと，ねずみや大きな虫と一緒に眠ること，鶏の鳴き声で目を覚ますこと，どれも初めての経験だった。帰国直後に古谷さんから次のようなメールをもらった[31]。

「私たちは常に携帯をもっていないと生活できない現状にいて，それを便利だと思い，当たり前のようにして生きている。薄い人間関係と複雑な社会が自分たちを圧迫しているとさえ感じました。タイの子供たちは機械の少ない世界で生きていて，何かに縛られることがなかったように思えました。」生きることの原点を振り返るために，電気も水道もないような村で生活する体験を一度はしてもらいたいと思う。

提言（3）たくさんの出会いを体験しよう

私は15年間民間の会社に勤務し，大学の教員となった。そこで驚いたのは，一般社会の持っている価値観と学校社会の持っている価値観の違いだった。学生の一人，長塚さんは「会社訪問をして就職の面接を受けてみて，初めて社会ではどういう人間が要求されているのかを知った」[32]という。

学生たちが社会のフロントに生きている人々と出会い，「人生をかけても惜しくない仕事に目覚めていく」こと，また，出会いを通して「自分のための小さな幸せの世界から抜け出して多くの人々のために働ける人になってもらいたい」という願いを持って1997年度より年間20～50の「教育学・出会いのプログラム」を企画・実施してきた。

そのプログラムの一つとして，筑波大学附属桐が丘養護学校に上原一恵先生の音楽の授業を訪問した[33]時のことである。参加学生の一人，酒井さんは「本当に子どもたちは演奏できるのだろうか」と思っていた。ところが演奏が始まると，子どもたちの溢れるほどのパワーに圧倒された。涙が出た。そして，急に自分が恥ずかしくなった。「私は，自分が五体満足に生まれてきて大学にも通わせてもらって何の不自由もなく生活してきた。それなのにそのことに感謝する訳でもなく，一日一日をただ漠然と生きてきた。毎日を無駄にして生きてきた自分をひどく後悔した。」と記録に書いている[34]。

様々な出会いの体験は，学生のみならず，学校の先生方にもしてもらいたいと思う。その出会いの体験の中から「勇気」「希望」「感謝」「後悔」など様々なものを得て，自分自身を深化させていくと，子どもたちとのかかわりも変わってくる。

提言（4）先人たちの志に学ぼう

就職活動中の大学４年生が，「自分は何がやりたいかわからないから，どこの会社を受けても面接ですべて落ちてしまう」といっていたことが私の中で印象深く残っている。いわゆる「いい学校に行き，いい会社に就職する」ことが幸せとされてきた価値観も，不況・リストラ・倒産の中で幻想であったのではないかと人々は感じ始めている。そんな中，人生かけても惜しくない「人生のお仕事」[35]を先人たちはどうやって見つけていったのかを若者たちに研究してもらいたいと思う。

吉田松陰[36]は，松下村塾においてある日，門下生の市之進[37]に庭を掃除するようにいいつけたが，

市之進はこれに逆らってなかなか掃除をしなかったということがあった。のちに松陰は市之進を呼び，次のように話をする。「市之進はこれから志を立てなさい。自分の信ずる道にむかってすすもうとするときは，死をもおそれず，なにものにも屈せず，しりぞかぬ，つよい心をやしなうのだ。それができたら，だれにでも反抗するがよい」[38]。松下村塾に集った若者たちが松陰から受け取ったものは志の種であったように思う。そしてそのエネルギーが明治維新へと向かっていくのである。

私は，志を持っていることが若者のアイデンティティの一つではないかと思うことがある。本来，志を見出し，自分が何をしたかったかを思い出す場として，また志を成就するための知識や技術を身に付ける場として学校は存在するのではないだろうか。

提言（5）ボランティア体験をたくさんしよう

1週間のタイの小学校滞在の体験が岩田さんと古谷さんの人生に投げかけたものは大きかったと思う。彼女たちの訪問のきっかけは「就職前に何かボランティア体験がしたい」ということだった。人は誰でも気持ちの底では「人にかかわりたい，人に尽くしたい」という気持ちを持っているのだと思う。タイを何度も訪問する中で何人もの日本人ボランティアに会ってきた。彼ら（彼女たち）は，すがすがしく，温かく，チャレンジ精神旺盛で，皆いい顔をしていた。貧困やエイズ問題や麻薬などの問題と正面から向き合い，その困難な状況の中で生きる子どもたちに寄り添う中で，自らも癒されていったのだと感じた。

私は国の内外において，もっと多くの若者にボランティア体験をしてもらいたいと思う。技術や経験が未熟であっても，若いということ，熱意があるということで，ボランティア体験をさせてもらえることは多い。自らが学ぶ気持ちがあれば，社会の多くの場面で学びの機会は開かれている。未来を担う若者を育てようという視点でかかわってくれる人も多い。そのような体験や出会いが「自分が本当にしたいこと」を発見することにもつながるのだ。

時には，苦労の多い体験もするかもしれない。しかし，人のために尽くし，自分の未熟さに涙し，人の温かさに感動する体験を通して人間性が恢復されていくのだと思う。そんなすがすがしい若者を今，世界は待っている。

おわりに —— 日本とタイの教育比較の取材を通して ——

タイの教育を調査する中で見えてきた日本の教育のよさもあった。三輪隆氏は，日本では学校教育外において，「倫理・道徳」を子どもたちに教える場があると指摘した。それは読書であり，メディアであるという。「少年・少女向けの物語などが日本にはたくさんある。その中に色々な倫理観が盛り込まれている」というのである。三輪氏も幼少の頃は少年少女世界文学全集などを読んで育ってきた。その中に大切な倫理観が織り込まれていたという。さらに，鉄腕アトムなどのマンガにも倫理観が織り込まれていたと三輪氏はいう。これらのメディアによって倫理観が育まれてきたことは，日本の社会の特色なのかもしれない。

また，三輪隆氏と共に中野穂積氏は，音楽にしても文学にしても日本の学校は幅広い知識を教えていることを日本の教育の特色としてあげた。それぞれの知識は浅いかもしれないが，誰がどんな本を書いたかを知っているだけでも，本屋に行った時に「読んでみよう」という気になり，その人の世界を広げるのというのである。

私は日本の教育を悲観的に思ってきたが，タイでの取材を通して，日本の教育の意外な可能性を見出し，希望をもらった感じであった。

何度かタイを訪問し，取材を重ねることで，日本とタイそれぞれの教育の光と闇が少しずつ見えてきたように思う。2004年３月に中野穂積さんに取材をした時に，「子どもたちは毎朝２kmの道のりを歩いて学校に喜んで出かけて行っているので，学校が好きなんでしょうね」といったことが印象深く残っている。ここに学校と子どもたちのかかわりの「基本」を見た思いがした。

子どもたちが生き生きと学校に通い，若者が自らを深化・成長させると同時に世界のあらゆる困難な状況に立ち向かっていくエネルギーを持って，学び鍛錬する場へと日本の教育がステージをあげていくことを願ってやまない。そのために私自身も，自らを深化させていきたい。

注

1 日本民際交流センター（代表秋尾晃正氏）1987年設立。タイ東北部及びラオスにおいて奨学金提供などの教育支援活動を行っている。年間奨学金提供ドナー数は約9000名。
参照 HP：http://www.minsai.org/（検索日：2004年４月10日）

2 1995年より毎年夏に「タイ教育研修旅行」を企画・実施。タマサート大学日本語学科，チェンダオ中学・高校，ファイチャカーン小学校，さくらプロジェクト，チェンライ教育大学，プラティーブ財団「行き直しの学校」など，毎回10ほどの教育機関を社会人や学生たちと訪問している。

3 松本淳編著『留学―日本の教育のすきまを埋める』（エイデル研究所）1994年２月　p.222　参照

4 同上著　p.64　参照

5 岡崎玲子著『レイコ@チョート校』（集英社）2001年11月　p.76　参照

6 同上著　pp.70-74　参照

7 「海外教育事情・国際比較教育制度論」の授業のプロジェクトの一環として，2003年12月20日にカンボジアからの留学生，レスミーさんに「カンボジアの教育事情」について取材した。

8 『学苑』710号（昭和女子大学近代文化研究所刊）1999年６月　p.24

9 National Nursery Training College No. 1

10 1996（平成８）年の中教審答申で「生きる力」の育成の重視が強調され，98年の教育課程審議会答申で小・中・高校に「総合的な学習の時間」を導入することが提言され，学習指導要領の改訂がなされた。
①中央教育審議会『21世紀を展望した我が国の教育の在り方について（第一次答申）』平成８年７月19日　参照
②教育課程審議会『幼稚園，小学校，中学校，高等学校，盲学校，聾学校及び養護学校の教育課程の基準の改善について』平成10年７月29日　参照

11 ドイ・モイ（Doi Moi）はベトナム語で「刷新」という意味。1986年12月の第６回ベトナム共産党大会で採択された。国家による経済活動の全面的統制体制を，緩和し撤廃していくという制度改革。

12 2001年度に昭和女子大学に留学

13 2003年度に昭和女子大学に留学

14 サンフランシスコ，ベイエリアにある名門女子大学。1852年創立。

15 松本淳編著　前掲著　pp.143-145　参照

16 「教育原理」の授業

17 1987年に単身で，タイ北部のチェンライ近郊でリス族やアカ族などの山岳少数民族の子どもたちを町の中・高校に通わせるリス生徒寮を開設し，以来生徒寮を通じて教育活動を続けている。1991年には，毎日新聞社の第

3回毎日国際交流賞と，ソロプチミスト日本財団主催の国際奉仕賞を受ける。1996年には「暁の家」を開いた。
参照 HP：http://www.sic-info.org/bank/saloon/0110sal/0110sals.html（検索日：2004年4月17日）

[18] この時の研修の記録は，松本淳「出会いによって引き出されるもの―タイ研修旅行―」（『季刊教育法』108号 エイデル研究所　1997年1月　pp.79-83）に掲載。

[19] さくらプロジェクトは，1991年よりチェンライ県ナムラット村にさくら寮を建設。
2001年5月現在147名の山岳民族の子どもたちが寄宿生活をしながら学校に通っている。代表は三輪隆氏。
参照 HP：http://chmai.loxinfo.co.th/~sakura/（検索日：2004年4月14日）

[20] 松本淳，前掲論文　p.83

[21] 松本淳，前掲論文　p.83

[22] 2001年5月にカンポン君は飛び級をして3年半で大学を卒業し，希望通り「さくらプロジェクト」のスタッフとなった。
参照 HP：http://chmai.loxinfo.co.th/~sakura/history.htm（検索日：2004年4月14日）

[23] 2004年3月15日現在

[24] 2004年3月にファイチャカーン小学校を訪問した時にアヒルはいなかった。どうしたのかとサニット校長に尋ねたところ，「鳥インフルエンザにかかるといけないので処分した（食べた）」のだという。

[25] 岩田さんは，昭和女子大学短期大学部初等教育学科を卒業し，2年間小学校の非常勤講師を経験して，2004年4月から小学校教諭になった。

[26] ファイチャカーン小学校訪問記録（岩田百代：2004年3月）

[27] 1998年当時

[28] 愛知教育大学附属岡崎小学校5年，柴田知佐さんの描いた絵は，地雷廃絶キャンペーンのポスターコンクールで特選に選ばれた。参照 HP：http://www.geocities.co.jp/NatureLand/6234/

[29] 「ノーモア地雷」の HP は，http://www.masayo.org/jhome/chisa/（検索日：2004年4月19日）

[30] 佐賀新聞 HP（1999年3月2日掲載）参照
http://www.saga-s.co.jp/main_1.html（検索日：2004年4月15日）

[31] ファイチャカーン小学校訪問記録（古谷有美：2004年3月）

[32] 長塚明子「日本の大学教育を考える」（『季刊教育法』119号　エイデル研究所　1999年3月）p.92

[33] 訪問したのは，1998年2月。

[34] 詳細は，松本淳編著『私たちの出会いの記録1998』（私家版）1999年11月　p.9　参照

[35] ここでいう「人生のお仕事」とは，職業に限らず，「人を喜ばせたい」「人を助けたい」「人に尽くしたい」「共同体を守りたい」など，その人の心の底にある願いも含めての意味。

[36] 1830～59年　幕末の思想家・教育者

[37] 松下村塾には，市之進，音之進，溝三郎という3人の不良少年がいた。鼻つまみ者の3人を吉田栄太郎が自宅に集めて指導していたが，後に松陰にたのんで，松下村塾に通わせるようにした。
古川薫著『松下村塾と吉田松陰』（新日本教育図書）1996年3月　p.109　参照

[38] 前掲著　pp.111-112

（まつもと　じゅん　　初等教育学科）